

学習意欲を養う漢文指導

～レベル別音読練習と遊説家の生き方に迫る発展的な学習～

国語 国語総合 普通科・第1学年
石川県立羽咋高等学校

1 事例の概要

古典の読解指導には、「通読→解釈→鑑賞・批判」の三つの段階が考えられるが、実際は、通読し解釈して終わる場合が多いと思われる。通し読みをした後、指導者または学習者が現代語訳を付け、時に応じて補足説明を加えて、その教材の指導を終える。これまでの自分の授業は、このようなワンパターンに陥りがちな授業であった。

このあり方を反省し、作品世界により深く入っていく授業を試みることで生徒の主体的な学習を促したいというのが本実践のねらいである。

加えて、生徒の興味関心を高める音読の指導方法の一試みを紹介する。

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・漢文への興味・関心を持つ。
- ・話の筋をとらえる力を身につける。
- ・漢文訓読の基礎を知る。

(2) 指導上の工夫点

① 作品の本質に触れる発展学習

「借虎威」は、魏から来た遊説家江乙が、楚の宣王にした話の中に出てくる喩え話である。北方の国々が君主である自分ではなく宰相の昭奚恤を恐れているとの噂を耳にした楚の宣王が、事実かどうかを群臣に確かめようとするが、昭奚恤の威勢を憚って誰も答えようとしない。その中、魏からきた遊説家江乙が前に進み出て、「借虎威」の喩え話で真相を解き明かす。昭奚恤は虎の威勢を笠に威張っていた狐と同じで、王の権勢を利用しているに過ぎないと。魏の国の遊説家である江乙のねらいは、昭奚恤の失脚、それに伴う楚の弱体化であった。

本校が採用している教科書には江乙と宣王の問答部分はカットされているため、ワークシートによる発展学習という形で提示した。教科書採録部分を一通り学習した後、「戦国の世の陰謀策術を説いた『戦国策』に動物の話があるのは妙だと思わないか。」と切り出し、ワークシートを配付した。眼目は話のおもしろさを味わうことにあるため、書き下し文と適度な語注を付けた。

B-1 ワークシート

② レベルアップ音読練習

音読レベルを段階的に設定した漢文プリントを用い、それぞれの生徒が自分の読みのレベルに合わせた部分を音読する取組である。目標は、全員が白文で淀みなく読めるようになり、達成感を味わうこととした。

準備物：音読プリント（レベル①振り仮名・訓点付、レベル②訓点付、レベル③返り点付、レベル④白文）
相互評価シート

方 法：漢文の授業冒頭に毎時間二人ペアで行う。一人2回音読。

(1回目) レベルは音読する生徒が自分で決める。ペアの相手から評価を受ける。

(評価 A:支援を受けずに読めた。評価B:時々支援を受けながら読めた。評価C:ほとんど全ての文で支援を受けた。)

(2回目) 1回目の評価がAならば2回目は一つ上のレベル、Bならば同じレベルに挑戦する。Cならば一つ下のレベルで練習する。

*参考WEBページ: 栃木県総合教育センター「教師のための教材研究のひろば」

<http://www.tochigi-edu.ed.jp/hiroba/>

B-2 音読プリント

B-3 音読相互評価シート

3 指導の実際

教科書 精選 国語総合『格言と故事』(出版社 東京書籍)

資料等 ワークシート

学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・留意点	評価規準
レベル別音読練習 (毎時)	・ペアで音読練習を行う。 ・評価シートに記入する。	・机間指導を行い、適宜助言する。 ・レベルアップの意識を喚起する。	・目標を持って音読している。
故事「借虎威」の読解	・口語訳を行う。 ・虎、狐、百獣は何をたとえたものか理解する。	・故事としての比喩の巧みさを読み取らせる。	・比喩を的確に理解している。
発展学習 [ワークシートにて]	・江乙は宣王に何を伝えようとしたのか読み取る。 ・江乙の発言のねらいは何か考える。	・各国と喩えられた動物との関係を理解する。 ・うまく理解できない生徒がいれば図式化して提示する。	江乙の主張を読み取っている。

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

① 作品の本質に触れる発展学習について

通常のレベルよりも深めた内容を扱うことで、生徒はいつも以上に学習意欲をもって授業に参加していた。授業後「おもしろかった」という感想も多く、知的好奇心を揺り動かす手立ての重要性を改めて認識した。

② レベルアップ音読練習について

国語に苦手意識を持っていた多くの生徒が、ようやく白文で読めるようになったことを嬉しそうに伝えてきた。スモールステップを用いた達成可能な目標設定によって、生徒の学習意欲が引き出せたと考える。また、その後の授業も、活気ある雰囲気が進み、生徒たちの漢文への関心の高まりを実感することができた。

(2) 課題

生徒の知的好奇心を刺激しても、それが単発で終わり、以後の学習指導につながらなければ学習意欲を養ったとは言えない。興味を引くような知識の伝授としてではなく、生徒の主体的な学習活動に寄与する発展学習の工夫を今後とも検討していきたい。

音読練習については、毎回変わらない形式で続けることは、惰性となるおそれがあるので、マイナーチェンジしていく必要を感じている。例えば、この単元では毎回同じペアで練習したが、相手を変えることがあってもよかったと思う。